

国立国語研究所学術情報リポジトリ

表紙,目次,奥付,その他

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2089

日本語科学

Japanese Linguistics

11

2002年4月

April, 2002

国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language
Tokyo, Japan

日本語科学 11

Japanese Linguistics 11

国立国語研究所

The National Institute for Japanese Language

2002年4月

April, 2002

コミュニケーション能力とは何か 鳥飼 玖美子 3

研究論文 Articles

Face Threatening Act を明示するメタ言語表現について

—討論形態の談話の分析から—

On metalinguistic expressions which show “face threatening act” baldly in Japanese discussions

加藤 陽子 KATO Yoko 7

日本語と韓国語における呼称選択の適切性

The degree of appropriateness of the use of address terms in Japanese and Korean

林 炫情 LIM Hyunjung 31

玉岡 賀津雄 TAMAOKA Katsuo

深見 兼孝 FUKAMI Kanetaka

「連語論」 <「移動動詞」と「空間名詞」との関係>—中国語の視点から—

‘Location nouns’ and ‘motion verbs’: A comparative study of Chinese and Japanese grammar

方 美麗 FANG Meili 55

ことば遊びは何を伝えるか？

—ヤーコブソンの<詩的機能>とグライスの会話理論を媒介として—

What does wordplay communicate?: An interpretation via Jakobson’s ‘poetic function’ and Grice’s conversation theory

滝浦 真人 TAKIURA Masato 79

調査報告 Reports

明治期学術漢語の一般化の過程

——『哲学字彙』と各種メディアの語彙表との対照——

A Study of the process of popularization of Meiji Era scholarly terms:
Comparisons of words in “*Tetsugaku Jii*” and words in media vocabulary
lists

真田 治子 SANADA Haruko 100

話者交替における発話の重なり

——母語場面と接触場面の会話について——

The overlap of utterances in turn-taking: Japanese conversations in native
and contact situations

木暮 律子 KOGURE Ritsuko 115

研究ノート Note

『国語年鑑』に見る分野別文献数の動向

——1985年～2000年の雑誌掲載文献——

A research on the trends of Japanese linguistic studies 1985～2000:
Based on Japanese linguistics bibliographic database

齋藤 達哉 SAITO Tatsuya 135
新野 直哉 NIINO Naoya

研究紹介 Brief Report

メディアにおけるジェンダーイデオロギーの再構築と維持

The construction of gender ideology in the Japanese media

大原 由美子 OHARA Yumiko 145

世界の言語研究所 (11) 科学研究最高審議会 スペイン語研究所

上田 博人 159

第9回 国立国語研究所国際シンポジウム報告

平成13年度国立国語研究所公開研究発表会報告

既刊内容 (第8号～10号)

投稿規定・執筆要領

『日本語科学』10 正誤訂正

編集後記

既刊内容（第8号～第10号）

【第8号】（2000年10月）

- ことばのサーモグラフィー 中西 進
連用修飾成分「ほど」句の用法について 井本 亮
関係動詞の語彙と文法的特徴—照合行為の介在をめぐって— 山岡 政紀
日本語心理動詞の適切な扱いに向けて 三原 健一
19世紀末の韓国語における日本製漢語—日韓同形漢語の視点から— 張 元哉
漢字語と仮名語における語処理の差異—英語話者日本語学習者の思考過程— 豊田 悦子・久保田 満里子
異体字に対するなじみと好み—接触印象・使用頻度との関係— 笹原 宏之・横山 詔一
明治初期小新聞に見る「です」の様相 長崎 靖子
総合雑誌『太陽』の本文の様態と電子化テキスト 田中 牧郎・小木曾 智信
世界の言語研究所(8) フィリピン語委員会 大上 正直
第8回国語研究所国際シンポジウムご案内
平成12年度国立国語研究所公開研究発表会ご案内

【第9号】（2001年4月）

- 厳しさの底にあるもの 野地 潤家
特集：電子化資料による日本語研究
 変動詞の活用のゆれについて—電子資料に基づく分析— 田野村 忠温
 新聞漢字調査の現状と将来 横山 詔一・笹原 宏之・エリック・ロング・谷本 玲大
 「日本語話し言葉コーパス」における書き起こしの方法とその基準について
 小磯 花絵・土屋 菜穂子・間淵 洋子・斉藤 美紀・籠宮 隆之・菊池 英明・前川 喜久雄
いわゆる詠嘆・含蓄の「も」について 畠山 真一
高知県方言ラ（一）の暗示性と明示性 上野 智子
九州における活用型統合の模様とその経緯—『方言文法全国地図』九州地域の解釈— 彦坂 佳宣
高校国語教科書における外来語の使用状況 橋本 和佳
被調査者の属性による偏りを持たない項目
 —『国語に関する世論調査』（H7年度調査～H10年度調査）から— 田中 ゆかり
世界の言語研究所（9）アイオワ大学（FLARE プログラム） 西郡 仁朗

【第10号】（2001年10月）

- 文化と言語資源 田中 穂積
空間移動を表す動詞の分析—構文特性・アスペクト特性・タクシス特性に基づいて— 岡田 幸彦
接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味—クセニとノニの記述と分析を巡って— 渡部 学
京都市方言・女性話者の「ハル敬語」—自然談話資料を用いた事例研究— 辻 加代子
『哲学字彙』再版と三版の増補訳語について 朱 京偉
『厚生白書』のカタカナ語 中山 恵利子
世界の言語研究所（10）コレヒオ・デ・メヒコ 上田 博人
国立国語研究所国際シンポジウムご案内

『日本語科学』投稿規定・執筆要領
(2002年4月現在)

1. 目的

本誌は、国立国語研究所における研究、ならびに国立国語研究所の研究活動と関連を有する研究の成果を公表することを通じて、広汎な日本語研究の発展に寄与しようとするものである。

2. 発行の時期

本誌は年2回(4月, 10月)発行する。(投稿の受付は随時)

3. 投稿資格

上記の目的に合致する内容の原稿であれば、投稿資格は問わない。

4. 原稿の内容と種類、分量

投稿原稿は未刊行のものに限る。なお、原則として、対象とする時代は明治中期以降とする。投稿原稿の種類と分量(タイトル、氏名、キーワード、要旨、概要を含む)は以下のとおり。

研究論文: オリジナルな知見の提供を含む学術論文。(20ページ程度)

調査報告: 調査結果の記述を主とする報告。(20ページ程度)

研究ノート: 問題提起, 事例報告, 中間報告などの小論文。(10ページ程度)

各投稿原稿は、CD-ROMの形でデータやプログラム等を添付することができる。

この他、所内外の研究者に**展望論文**(研究動向, 現時点での課題, 将来の展望などについて論じた論文, 20ページ程度), **書評論文**(20ページ程度)の執筆を依頼することがある。

5. 原稿の書式

- 1) 原稿は日本語または英語で執筆する。ただし、例文等において中国漢字(簡体字・繁体字), ハングル, キリル文字, ギリシャ文字を用いることは可(それ以外の文字はローマ字化)。
- 2) 原稿はA4判横書き, 43字×36行で作成する。(編集委員会が認めた場合にかぎり縦書きも可。A4判縦書き, 30字×21行×2段。)英文の場合はマージン上下2.5cm, 左右2cm(フォント12ポイント, 1.5スペース)を目安に原稿を作成する。原稿はワープロを使用してできるだけ刷り上がり時のイメージに近い形で作成することが望ましい。
- 3) 研究論文及び調査報告には、**キーワード**(5つ以内), **要旨**(問題と結論の要約, 10行程度), **概要**(議論全体の概要, 英文は250語以内, 和文は20行以内)をつける。研究ノートには要旨とキーワードのみをつける。和文論文の場合, 要旨・キーワードは日本語, 概要は英語を用いる(概要には英語のキーワードもつける)。英文論文の場合, 要旨・キーワードは英語, 概要は日本語を用いる(概要には日本語のキーワードもつける)。英文のネイティブ・チェックは執筆者の責任においておこなう。
- 4) 注と文献は本文の後にまとめて示す。文献一覧の書式は以下のとおり。
著者名(発表年)「論文タイトル」『書名/雑誌名』巻号(雑誌の場合) ページ 発行所
例: 井上 優・生越直樹(1997)「過去形の使用に関わる語用論的要因—日本語と朝鮮語の場合—」『日本語科学』1, 37-52, 国書刊行会
宮島 達夫(1972)『国立国語研究所報告43 動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

Bolinger, Dwight (1978) Yes-no questions are not alternative questions. H. Hiz (ed) *Questions*. 87-105. Dordrecht: D. Reidel Publishing Company.

Hudson, Richard (1975) The meaning of questions. *Language* 51. 1-31.

- 5) 付属CD-ROMにデータ等を添付する場合は、容量やデータの形式等について、あらかじめ編集委員会に確認をとってから投稿する。

6. 査読

研究論文、調査報告、研究ノートは、編集委員会が依頼した2名の査読者が査読要領にもとづき審査する。編集委員会は、査読結果にもとづいて論文の採否を決定する。著者の氏名は査読者に公開せず、査読者の氏名も著者に公開しない。査読者と著者との連絡（査読者から著者への照会や修正指示、著者から査読者への回答など）はすべて編集委員会を介しておこなう。

7. 投稿の手続き

投稿原稿は随時受けつける。投稿に際しては、「著者の氏名/所属/連絡先（共著の場合は代表者の連絡先）/原稿の種類（研究論文、調査報告、研究ノートの別）」を明記の上、原稿一式を編集委員会に送付する。投稿原稿は原則として返却しない。

8. 採録決定後の修正

採録決定後、体裁や書式について編集委員会から著者に修正を求める（あるいは編集委員会の判断で書式の細部を変更する）ことがある。査読者及び編集委員会から指示があった箇所を除き、採録決定後の改稿や修正は認めない。

9. 著作権

- 1) 図版の転載など著作権にかかわることがらは、投稿の際に編集委員会まで知らせること。
- 2) 掲載された論文等の著作権（著作権法第27条、28条を含む）は国立国語研究所に帰属する。

投稿原稿は、下記編集委員会まで郵送のこと。

問い合わせ先、文書・FAXまたは電子メールで編集委員会まで。

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会

FAX 03-3906-3530（共用につき『日本語科学』編集委員会宛明記のこと）

E-mail kagaku@kokken.go.jp

URL <http://www.kokken.go.jp/public/kagaku.html>

『日本語科学』10 正誤訂正

p. 28 注の2

誤：「移動法をあらわす運動」 → 正：「移動法をあらわす運動の動詞」

p. 33 Keywords

誤：process' result → 正：process or result

p. 33 Abstract 2行目

誤：These verbs mean “place passed” when combined with “place-*o*,” →

正：“Place-*o*” means “place passed” when combined with these verbs,

編集後記

◇本号には、論文4編、調査報告2編、研究ノート1編が掲載された。査読雑誌としては、とてもバランスのよい構成となった。この原因としては年々顕著になってきた投稿論文の増加傾向があげられる。平成12年は25編あった投稿論文が、平成13年には30編と5編増加している。ただし、査読委員による厳密な査読が行われるため、このすべてが掲載されたわけではもちろんない。掲載率は本号で4割ほどとなっている。前号の掲載率が3割ほどであったことを考えると、投稿論文の質が向上してきたのではないかと思っている。また、投稿が増加した背景には、大学や研究機関で近年取り入れられることが多くなった外部評価の存在であろう。外部評価では査読論文以外は評価の対象にはまず入らないのである。今後とも各方面からの多くの投稿を期待するものである。

◇本号の英文校訂は国立国語研究所招聘研究員のカネギ・ルース氏にお願いした。

(2002.4.3 伊藤雅光)

編集委員

伊藤 雅光 (委員長, 国立国語研究所)

大島 資生 (東京大学留学生センター)

尾崎 喜光 (国立国語研究所)

加藤 安彦 (国立国語研究所)

熊谷 智子 (国立国語研究所)

杉本 明子 (国立国語研究所)

鈴木 美都代 (国立国語研究所)

塚田 実知代 (国立国語研究所)

山田 進 (聖心女子大学)

横山 詔一 (国立国語研究所)

『日本語科学』11

2002年4月

国立国語研究所

〒115-8620 東京都北区西が丘3-9-14
TEL.03-3900-3111(代表)

[本書の市販品発行所]

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15
TEL.03-5970-7421 FAX 03-5970-7427